

第32回 現代世界の地誌的考察

■■ 現代世界の諸地域編 ■■

世界のさまざまな地域を見てみよう

～アフリカ～

監修・講師

島田周平

学習のねらい

アフリカは、世界の陸地の5分の1を占める大陸で、自然環境は多様で資源も豊富である。地域紛争や貧困問題を抱える国があるが、今世紀に入り高い経済成長率を遂げる国も現れた。また2050年には世界人口の4分の1をアフリカ人が占めると予想されている。今後ますます重要性を増すアフリカ諸国が直面している課題と発展の可能性について見てみよう。

今回のポイント

- アフリカの自然と多様な文化
- 植民地支配の影響と最近の発展
- グローバル化時代のアフリカ

■■ アフリカの自然と多様な文化 ■■

アフリカ大陸には、ケッペンの気候区分における熱帯(熱帯雨林気候、サバナ気候)、乾燥帯(ステップ気候、砂漠気候)、高山気候が各地に広がっている。

西アフリカでは、赤道から北に行くにしたがい、熱帯雨林気候、サバナ気候、ステップ気候そして砂漠気候へと変化し、サハラ砂漠の北側は温帯の地中海性気候となる。

中央アフリカを赤道から南に向かえば、熱帯雨林気候、サバナ気候から南端部の温帯へとつながり、最南端の南アフリカでは西岸海洋性気候や地中海性気候がみられる。

東アフリカでは、赤道直下ながら氷河を頂くキリマンジャロ山に象徴される高山気候がみられ、そのすそ野には野生動物公園で有名な広大なサバナ気候が広がっている。

社会・文化を見ると、マグレブと呼ばれる北アフリカ地域はコーカソイド型の人たちが住むイスラーム地域で、中東との社会政治的つながりが強い。これに対しサハラ砂漠以南のサブ・サハラ地域は、ネグロイド型の黒人が多く住む地域で、イスラーム教に加えキリスト教や伝統的宗教も盛んな地域である。

■■ 植民地支配の影響と最近の発展 ■■

サブ・サハラ地域にはサハラ砂漠越え交易で栄えた王国が幾つもあった。15世紀にポルトガル人が西アフリカ沿岸部に進出して海路交易をはじめ、16世紀に大西洋越えの奴隷貿易が盛んになると西アフリカ沿岸部の王国が栄えた。

19世紀に奴隷貿易が禁止され、「合法貿易」と呼ばれる農産物や鉱産物の貿易が盛んになると、ヨーロッパ諸国間でアフリカ沿岸部での商業権益をめぐる争いが盛んになってきた。1885年のベルリン会議で領土の分割が行われ、これが後の植民地支配の基礎となった。

西アフリカは、現地人の反発や厳しい自然条件のためヨーロッパ人の入植が進まず、現地の農民が生産する熱帯農産物を白人が買い上げる「小農型輸出植民地」の地となった。

東アフリカや南部アフリカ地域にはヨーロッパ人が入植し、広大な土地で大規模な農牧業(牧畜、穀物生産、換金作物生産)や鉱業を行う「鉱業・プランテーション型輸出植民地」ができた。この入植型の南アフリカやジンバブエでは、原住民の居住地を制限したうえにさまざまな人種差別をするアパルトヘイト政策が実施された。これらの国では、黒人政権誕生後、人種間の和解が最大の政治課題となっている。

■ ■ グローバル化時代のアフリカ ■ ■

国際通貨基金(IMF)の報告(2015年)では、2001年からの10年間と11年からの5年間の国内総生産(GDP)の国別伸び率で、世界上位10か国の半数以上をアフリカ諸国が占めている。この成長は、鉱産資源開発のための投資流入によるものであった。

この経済成長にあわせインドや中国からの工業製品の輸入が急増してきた。アフリカはすでにBOPビジネス(低所得者層を対象とした持続可能な事業活動)の対象となっているが、一般のビジネスにとっても近い将来有望な市場になると期待されている。

ユニセフの予測によれば、現在約11億5千万人であるアフリカの人口は、2050年には24億人になり世界の人口の4分の1を占めるといふ。現在でも問題になっているアフリカからヨーロッパへの難民が、人口増大と政治的混乱でさらに増大する可能性もある。

世界の政治経済の影響を強く受けるようになってきているアフリカ諸国であるが、同時に世界に対して大きな影響を与える存在になりつつあるといえる。